

『金瓶梅』の構想

——『水滸傳』からの誕生——

はじめに

『金瓶梅』は、『水滸傳』第二十三回〜第三十二回の「武松物語」の中の、第二十三回〜第二十七回「西門慶、潘金蓮殺し」のくだりを敷衍したものである。この部分は、素手で虎を殺して一躍英雄となった武松が、毒殺された兄武大の仇を討つため、兄嫁潘金蓮、及び彼女と密通した町の金持ち西門慶を血祭りにあげるといふ、『水滸傳』の中でも非常におもしろいくだりとなっている。『金瓶梅』は、その殺されるはずの潘金蓮と西門慶がもしもこの時殺されなかったら、という設定で物語が進行する。

この、武松による「西門慶、潘金蓮殺し」は、『金瓶梅』の第一回〜第六回（武松の虎退治から、西門慶と潘金蓮が武大を毒殺するまでの話）、第九回〜第十回（東京へ行っていた武松の歸還、及び兄の死を知った武松が復讐を試みるも失敗して流される話）、第八十七回（流刑から戻った武松が潘金蓮を殺害する話）に描かれる。第一回〜第六回は、『水滸傳』の第二十三回〜第二十六回を、プロットだけでなく文章までもほぼ借用していることから、『金瓶梅』の作者が傳承

『金瓶梅』の構想

川島優子

過程にあった水滸説話ではなく、刊行された『水滸傳』を用いて『金瓶梅』を作ったことがわかる。更には、數ある『水滸傳』のテキストの中でも、その字句の一致する度合いが高いことから、百回本系統に據ったであろうことが明らかとなっている。つまり作者は、武松による「西門慶、潘金蓮殺し」の部分だけでなく、『水滸傳』全體を讀んでいたのである。實際『金瓶梅』には、『水滸傳』のその他の部分のプロットや詩詞、駢語の借用も多く見られる。一方で『水滸傳』以外の、話本、戯曲、散曲等、あらゆるジャンルの様々な作品も、『金瓶梅』の素材として用いられていることが指摘されている。

『金瓶梅』が「どのように作られたのか」を考察する場合、これら素材となった作品を同等に扱い、分析を加える必要がある。しかし『金瓶梅』のような長篇の作品が「何故作られたのか」を考察する場合、その影響については、『水滸傳』と他の作品との間に歴然とした次元の差があると言わざるをえない。『金瓶梅』の主人公は『水滸傳』第二十三回〜第二十六回に登場するあの西門慶と潘金蓮である。このことからしても、『金瓶梅』の作者の創作意欲をかき立てたものが『水滸傳』に他ならなかったことは明らかである。従來この兩書の關

係に關しては多くの論が展開されているが、主に重複部分における言語、描寫、内容の相違を通して、成立問題や表現技巧等が論じられる傾向にあった。^④しかし、『金瓶梅』が「何故作られたのか」を考へるならば、その母胎である『水滸傳』全體に目を向ける必要があるのではないだろうか。

本稿では、『金瓶梅』が『水滸傳』をいかに受容し、いかに發展させたか、つまり『金瓶梅』の作者が『水滸傳』の中から何を切り取り、それをどのように作りかえて『金瓶梅』という作品を生み出したかという點に關して、主にその構想面から考察を加え、更には『金瓶梅』の作者の執筆動機、執筆態度についても考へてみたい。

一 『水滸傳』と『金瓶梅』の構成

(1) 『水滸傳』の構成

『水滸傳』は第七十一回を境にその構成が一變する。^⑤このことは明の崇禎年間に、金聖嘆が第七十二回以降を切り捨て、七十回本『水滸傳』を刊行したことから窺える(七十回本は、もとの第一回を楔子とし、以下一回ずつずらして全七十回としたものである)。この『水滸傳』の構成は以下のようなものである。

I・第一回〜第七十一回 梁山泊盜賊集團の形成

II・第七十二回〜第八十二回 招安までの物語

III・第八十三回〜第九十回 遼征伐

IV・第九十回〜第百回 方臘討伐と結末

第七十一回以前は、豪傑達が如何なる理由で如何なる過程を経て梁山泊へ集まることになったのかが銘々傳の形で語られる。このIは、

- 第一回 伏魔殿の話(プロローグ)
- 第二回〜第三回 王進と史進の物語
- 第三回〜第七回 魯智深の物語
- 第七回〜第十一回 林冲の物語
- 第十二回〜第十三回 楊志の物語
- 第十四回〜第十七回 生辰綱の話
- 第十八回〜第二十二回 宋江の物語
- 第二十三回〜第三十二回 武松の物語

……………

と、短篇的な英雄物語が數珠繋ぎに並んだ構成になっている。^⑥しかし百八人全員についていちいち詳しく語られる譯ではなく、數名の主要人物の物語が語られる中、それ以外の人物はそれに付隨する形で觸れられるにすぎない。『水滸傳』は一人の作者によって全てが創作されたものではなく、長い期間を経て別個に成立、發展してきた水滸説話や水滸戯曲の集大成ともいふべき作品であるが、この短篇的な銘々傳が數珠繋ぎになった構成は、そうした成立過程をも反映している。

こうして豪傑達がひとり、またひとりと梁山泊に集まり、第七十一回、ようやく梁山泊の忠義堂に百八人全員が集合することとなる。これ以降、それまで銘々傳の數珠繋ぎになっていた作品の構成は一變し、梁山泊に集結した豪傑達が、前半のように全くの個人としてではなく、集團の一員として行動するようになる。官軍と戦い、それを打ち破った彼らは、第八十二回、ついに招安を迎える。こうして官軍に組みこまれた梁山泊軍だったが、方臘との戦いにおいて多くの豪傑達を失い、物語は幕を閉じることとなる。

以上、『水滸傳』は、

・①銘々傳(豪傑達の物語)↓②梁山泊に集結↓③集團化した後の物語(一時隆盛を極めるが、やがて下降線をたどる)という構成をとっていることが確認できた。

(2)『金瓶梅』の構成

さて一方の『金瓶梅』は構成上大きく三つに分けることができる。

I・第一回〜第二十九回 西門慶と女性達との物語

II・第三十回〜第八十八回 西門慶のサクセスストーリー

潘金蓮の嫉妬と戀の物語

III・第八十九回〜第百回 西門家のその後

Iでは、西門慶と女性達との物語が語られる。西門慶は最終的に六人の夫人を抱えることとなるが、その夫人となる(或いはなり損ねた)女性達が如何なる理由で如何なる過程を経て西門家へ集まることになったのか銘々傳の形で語られるのである。このIは、さらに細かく分けると、

第一回〜第十二回 潘金蓮の物語

第十三回〜第二十一回 李瓶兒の物語

第二十二回〜第二十九回 宋惠蓮の物語

と、やや短篇的な話が横並びになった構成になっている。①こちらも『水滸傳』同様、六人全員についていちいち詳しく語られる譯ではなく、数名の主要人物の物語が語られる中、それ以外の人物はそれに付随する形で紹介されるにすぎない。

まず最初に、第五夫人となる潘金蓮の物語が語られる。しがたない蒸し餅賣りの夫武大に不満を抱いていた潘金蓮は、やがて西門慶と關係を持つようになり、夫を毒殺して西門家に輿入れする。この間、西門

慶の第一夫人である吳月娘、及び第二夫人李嬌兒に關しては第二回で、第四夫人孫雪娥に關しては第九回で、西門慶の夫人となったいきさつがごく簡単に紹介される。第三夫人孟玉樓の輿入れに關しては、第七回、この「潘金蓮の物語」に挿入される形でやや詳しく語られる。

次に語られるのは第六夫人となる李瓶兒の物語である。彼女はもともと西門慶の友人花子虛の妻であった。廓遊びばかりして家に居着かない夫に不満を抱いていた彼女は、やがて西門慶と關係を持つようになり、夫を死なせ、西門家に輿入れする。

續いて、西門家の下男來旺の妻である宋惠蓮の物語が語られる。西門慶に目をつけられた宋惠蓮は、夫が東京に使いに出されている間に西門慶と關係を持つが、夫を流刑に追い込むこととなった擧げ句、西門慶夫人として落ち着くことなく縊死してしまう。

短編ものの集大成である『水滸傳』の銘々傳が互いにはほとんど關わり合うことなく數珠繋ぎになっているのに對し、『金瓶梅』は傳承に由來を持たない個人の創作である爲、その銘々傳も『水滸傳』ほど單純な構成にはなっておらず、いずれの銘々傳にも、潘金蓮の介入が見られる等、關連性が保たれてはいる。しかし、潘金蓮以外の夫人がストーリー展開に影響を及ぼす等の介入をすることはほとんどなく、「李瓶兒の物語」で主役級の描かれ方をしてきた李瓶兒ですら「宋惠蓮の物語」においては點景と化するなど、それぞれの物語が短篇的な要素を帯びていることが認められる。

IIの第三十回以降、作品の構成はそれ以前の短篇的なもの(縦に切りうる構造)から、西門家という集合體を舞臺に多層(横に切りうる構造)化する。中でも大きく二つの層、「西門慶のサクセスストーリー」と「潘金蓮の嫉妬と戀の物語」に分けることができよう。この二つは、

西門慶を媒介として接点を持ちつつも、深く関わり合うことなく、それぞれに進行していく。

もともと薬屋だった西門慶は、質屋、絲屋、呉服屋と次々に商賣の手を廣げていく。政治面でも、第三十回で山東提刑所の理刑(副長官)の職に就いた後、中央の高官達をもてなしたり、蔡京及びその執事翟謙との關係を深めたりしつつ、やがて第七十回では掌刑(長官)にまでぼりつめる。また女性との交渉も、第四十九回で胡僧に媚薬を譲り受けてからはますます盛んになり、すでに關係ができていた番頭の妻王六兒を始め、長男官哥の乳母であった如意、妓女の鄭愛月、王招宣の未亡人林太太、番頭賁四の妻、下男來爵の妻と、次々に女性遍歴を重ねる。西門慶は第七十九回、適量以上の媚薬を潘金蓮に飲まされて命を落とすこととなるのだが、彼の財力、権力、精力は、その死の直前まで右肩上がりの状態を續ける。まさしく「西門慶のサクセスストーリー」である。

その一方で、潘金蓮を中心とした「潘金蓮の嫉妬と戀の物語」が語られる。第三十回、第六夫人李瓶兒が官哥を出産すると、潘金蓮の本格的な嫉妬が始まる。彼女は何かにつけて李瓶兒を當てこすり、自分の女中である秋菊を虐待することで間接的に李瓶兒に嫌味を言ったり、吳月娘と李瓶兒を仲違いさせるべく立ち回ったりもする。潘金蓮の嫉妬は官哥にまでも及ぶ。第五十九回ではついに飼っていた猫を官哥に飛びつかせ、死なせてしまう。官哥を失った悲しみ、潘金蓮の嫌がらせによるストレスなどで持病が再發した李瓶兒は、ついに第六十二回、死を迎えることとなる。李瓶兒の死後も、その死をいつまでも悲しむ西門慶に食ってかかる等、潘金蓮の嫉妬が止むことはないのだが、その一方で對立構造は潘金蓮vs李瓶兒↓潘金蓮vs吳月娘へと移っていく。

そして第七十五回、ついにそれが表面化し、潘金蓮と吳月娘は大げんかを引き起こす。その後何とか事は収まるものの、西門慶の死後、潘金蓮は吳月娘によって西門家を追い出されることとなる。

西門慶の寵愛を巡って嫉妬の物語を展開させる一方、潘金蓮は娘婿である陳經濟とも戀の物語を繰り廣げる。第十八回、一目見たその時から互いに好意を抱くようになったふたりは、幾度と無く人目を忍んで戯れ合う。西門慶の死後、ついに想いを遂げたふたりは、その後女中の春梅も仲間に入れ、ますます關係を深めていく。しかしその關係がとうとう吳月娘の知るところとなり、春梅、陳經濟、潘金蓮と立て続けに西門家を追い出されてしまう。百兩で賣りに出された潘金蓮を手に入れるべく、陳經濟は東京の親元へ資金調達に出かけるが、その間に、潘金蓮は戻ってきた武松によって殺されてしまう。

武松の手で息の根を止められた潘金蓮が、春梅によって手厚く埋葬された後、物語は最後のⅢに入る。ここでは、その後浮き沈みの激しい人生を送る陳經濟、富と地位を手に入れた春梅、落ちぶれていく西門家(吳月娘)を中心としつつ、物語が收束に向かう。

以上、「金瓶梅」は、

・①銘々傳(女性達の物語) ↓ ②西門家に集結 ↓ ③集團化した後の物語(一時隆盛を極めるが、やがて下降線をたどる)
語(一時隆盛を極めるが、やがて下降線をたどる)
という構成をとっていることが確認できた。

二 兩書の關係

さて、「水滸傳」と『金瓶梅』の構成をもう一度まとめると、いずれも、①銘々傳 ↓ ②梁山泊或いは西門家に集結 ↓ ③集團化した後の物語(一時隆盛を極めるが、やがて下降線をたどる) という構成になっ

ている。この構成の相似が、意識的なものであるのか、或いは偶然の結果であるのか、次にその點を検討する必要があるだろう。ここで注目すべきは、①から③へと物語の構造が大きく變わる節目となる②に描かれる、「天の礪」の降下と「吳神仙の占い」の場面である。

『水滸傳』第七十一回、それまでに梁山泊へ集まってきた豪傑達計百八人が梁山泊の忠義堂に全員集合する。と、そこへ、突然天から礪が降ってくる。

是夜三更時候、只聽得天上一聲響、如裂帛相似、正是西北乾方天門上。衆人看時、直豎金盤、兩頭尖、中間闊。又喚做天門開、又喚做天眼開。裏面毫光射人眼目、霞彩繚繞、從中間捲出一塊火來、如捲捲之形、直滾下虛皇壇來。那團火邊壇滾了一遭、竟攢入正南地下去了。此時天眼已合。衆道士下壇來。宋江隨即叫人將鐵鍬鋤頭、掘開泥土、根尋火塊。那地下掘不到三尺深淺、只見一箇石礪、正面兩側各有天書文字。……良久（何道士）說道、「此石都是義士大名、鐫在上面。側首一邊是『替天行道』四字、一邊是『忠義雙全』四字、頂上皆有星辰南北二斗、下面却是尊號。若不見責、當以從頭一一敷宣。」……

その夜の三更（眞夜中）頃、天上から帛を裂くような音が聞こえてきました。ちょうど西北乾の方の天門の上からです。一同見ますに、金盤の、兩端が尖り眞ん中が廣くなっているものが、地面と垂直に浮かんでおります。これを天門が開くとも、天眼が開くともいいます。その内側から放たれる長細い光が人々の目を射したかと思うと、色鮮やかな霞がたちこめ、眞ん中から丸い斗のような形をした一塊りの火がくるくると回りながら出てきて、虛皇壇のところへ轉がり下りました。その火の塊は壇をぐるりと一周

『金瓶梅』の構想

した後、眞南の地面の下にもぐり込んでしまいます。この時すでに天眼は閉じられておりました。道士達が壇を下りて來ます。宋江はただちに部下に命じて鐵製の鍬や鋤で土を掘り起こさせ、火の塊を探させました。と、三尺ほど掘らぬところに、礪があるではありませんか。その両面にはそれぞれ天書文字が刻まれております。……ややしばらくして何道士が言います。「この石の上には、全部に義士方の御名削が彫りつけられています。側面には、一方に『替天行道』の四字が、もう一方には『忠義雙全』の四字があり、てっぺんには全て南北二斗の星辰が、下の方には尊號が書かれています。差し支えなければ初めからひとつひとつ全て読んで差し上げましょう。」……【第七十一回】

礪には、宋江以下百八人全員の名前と「替天行道」「忠義雙全」の文字が刻まれていた。そこで彼らはどうして一堂に會すこと、及びそれぞれの地位があらかじめ天の定めるところであったことを知る。この第七十一回以降、彼らはこの礪に刻まれていた「替天行道」「忠義雙全」をスローガンに歩み出すこととなる。

一方の『金瓶梅』では、宋惠蓮の物語が落着し、夫人達が西門家に勢揃いした第二十九回、西門慶の同僚である周守備の紹介で、吳神仙という「相面先生」が西門家を訪れる。

須臾、那吳神仙頭戴青布道巾、身穿布袍、草履、腰繫黃絲雙穗繖、手執龜殼扇子、自外飄然進來。年約四十之上、生的神清如長江皓月、貌古似太華喬松、威儀凜凜、道貌堂堂。原來神仙有四般古怪、身如松、聲如鐘、坐如弓、走如風。但見他、

能通風鑑、善究子平。觀乾象能識陰陽、察龍經明知風水。五星深講、三命祕談。審格局、決一世之榮枯。觀氣色、定行年之休

咎。若非華嶽修真客、定是成都賣卜人。

しばらくすると、かの吳神仙が黒木綿の道士の頭巾をかぶり、木綿の長衣をまとして草履をはき、腰にはふさが二つついた黄色い紐をぶら下げ、手には龜の甲羅の扇子を持ち、飄然として表から入って來ました。年は四十を過ぎたくらい、顔つきの清らかなることは長江の皓月の如く、貌の古めかしいことは華山の喬松に似て、威儀は凛々、風貌は堂々としております。そもそも神仙には四つの變わったところがありました。身は松の如く、聲は鐘の如く、坐れば弓の如く、走れば風の如く、といったところですよ。この神仙、

能く風鑑に通じ、善く子平を究む。乾象を觀て能く陰陽を識り、龍經を察して明らかに風水を知る。五星を深く講じ、三命を祕かに談ず。格局を審らかにして、一世の榮枯を決し、氣色を觀て、行年の休咎を定む。若し華嶽修真の客に非ずんば、定めて是れ成都賣卜の人ならん。【第二十九回】

このまさしく仙人の風貌を持つ吳神仙によって、西門慶とその六名の妻妾及び西門大姐、春梅の計九名がその行く末を占われる。

……玉樓相畢、叫潘金蓮過來、那潘金蓮只顧嬉笑、不肯過來。月娘催之再三、方纔出見。神仙擡頭觀看這個婦人、沉吟半日、方纔說道、「此位娘子、髮濃鬢重、光斜視以多淫。臉媚眉彎、身不搖而自顫。面上黑痣、必主刑夫。人中短促、終須壽夭。

舉止輕浮惟好淫、眼如點漆壞人倫。

月下星前長不足、雖居大廈少安心。」

相畢金蓮、西門慶又叫李瓶兒上來、教神仙相一相。神仙觀看這個女人……。

……玉樓の觀相が終わると潘金蓮を呼びますが、潘金蓮はけらけらと笑うばかり、こちらへ來ようとはしません。月娘に再三促された末、ようやく出てきました。神仙は頭をもたげてこの女を觀、しばらく考え込んでおりましたが、やっと口を開いてこう言います。「この奥様は、髮が濃くて鬢が重く、斜視であるのは多淫であるが故です。顔は媚び眉は曲がり、體は搖すらなくともおのずと震えております。顔に黒い痣があるのは、夫を不幸にする前兆。人中が短いので、きつと早死にされるでしょう。

舉止の輕浮なるは惟好淫、眼の漆を點するが如きは人倫を壞す。月下星前長えに足らず、大廈に居ると雖も安心を少く。」

金蓮の觀相がおわると、西門慶、今度は李瓶兒を呼んで神仙に觀させます。神仙がこの女を觀ますに……。【第二十九回】

この吳神仙の占いはそれぞれの人物の一生をほぼ言い當てており、第二十九回以降のストーリーはそれに沿った形で展開していくこととなる。

明清の長篇小説において、こういったやや現實離れした場面が描かれること自體は決して珍しいことではない。『水滸傳』にも第一回伏魔殿の場面、第四十二回宋江が九天玄女に天書を授かる場面等が、『金瓶梅』にも第六十二回潘道士によるお祓いの場面、第一百回亡者達の靈が現われる場面等が見られる。しかし、これらの場面と「天の碣」及び「吳神仙の占い」とはその意味合いが異なる。『水滸傳』第七十一回の「天の碣」は、百八人の主要人物を改めて紹介すると共に（これ以降梁山泊入りする者はいない）、「替天行道」「忠義雙全」という、今後彼らが歩むべき道を提示するという役割を擔っている。『金瓶梅』第二十九回の「吳神仙の占い」も同様に、主要人物を改めて紹介する

と共に（これ以降西門家に嫁いでくる者はいない）、その後彼女達がたどることとなる運命を提示するという役割を擔っている。兩者は單によく似た超自然的場面というだけではなく、いずれもストーリー展開の「總括」と「豫言」という役割を擔っているのである。のみならず、いずれもこれまでのやや短篇的な物語をつなぎ合わせた構成から、長篇的構成に移行するという、まさに物語の構成が大きく變わる要の部分に設置されており、物語の構造上同じ機能を與えられていることがわかる。つまり『金瓶梅』の大きな構造は、『水滸傳』の構造を意識的に模したものだと考えられるのである。『金瓶梅』は單に部分的なプロットや文章を『水滸傳』から借用したというだけではなく、全體構造をも模倣した作品だったのだ。

では『水滸傳』と同じ枠組みの中で、『金瓶梅』は一體何を描いているのだろうか。『水滸傳』が「英雄」の物語であることは、『水滸傳』の前半が、「英雄」達が宋江を中心とした梁山泊へ集まってくる銘々傳によって構成されていることから明白である。一方『金瓶梅』の前半は、女性達が西門家へ集まってくる銘々傳によって構成されている。注目すべきは、この銘々傳を形づくる女性、すなわち潘金蓮、李瓶兒、宋惠蓮が、いずれも夫がいる身でありながら他の男（西門慶）と關係を持ち、夫を破滅に追い込むという、「淫婦」の形象を持つ女性だということである。つまり『水滸傳』が「英雄」の物語だとすれば、『金瓶梅』は「淫婦」の物語だということになる。

『水滸傳』が「英雄」を描き、『金瓶梅』が「淫婦」を描いた作品だということはずでに指摘される場所でもある。しかしそれは、『水滸傳』では「英雄」（武松）がその豪傑ぶりを發揮して活躍するのに對し、『金瓶梅』では「淫婦」（潘金蓮）がその淫亂ぶりを發揮して活

躍するという、表面的な意味においてに過ぎず、その意味では、『金瓶梅』は「豪商」を描いた作品だとも、「淫夫」を描いた作品だとも言い換えが可能である。

實際、一般的に『金瓶梅』は『水滸傳』の惡玉、西門慶を主人公に据え、彼に極惡非道の限りを盡くさせた作品だと考えられている。確かに『金瓶梅』の主人公は西門慶なのだが、實は彼の人物像は意外にもはっきりとつかめないものである。西門慶が金や權力を手に入れている様も描かれてはいるものの、彼自身は大した努力も拂わず、金持ちの未亡人を娶ったり、賄賂を受け取ったりすることで財を手に入れ、その經濟力をもとに接待の依頼を受けることで社會的基盤を固めていく。商賣や政治に關する細かい描寫も確かに見られるのだが、そこに彼の必死の努力、情熱、惡どき等はさほど感じられない。むしろそんな西門慶を中心とした周圍の人物達の方が活き活きと描かれる（この點、彼は『水滸傳』の宋江と同様である）。しかももし「惡玉」という視點から『金瓶梅』が發想されたのであれば、生き延びた西門慶、及び『水滸傳』にあまた登場する西門慶のごとき「惡玉」が權力者（例えば蔡京）のもとへ集結していくという筋立てとて可能だったはずである。ところが『金瓶梅』の前半は、そんな惡男どもの銘々傳にはなっていない。

その他、『金瓶梅』には、政治家、商人、たいこ持ち、やり手、妓女……、様々な人間が描かれる。彼らもまた、善玉が惡玉を成敗するという『水滸傳』の單純な物差しでははかり切れない人物ばかりである。しかし『金瓶梅』が描こうとしているのはそのいずれでもない。『金瓶梅』の構造を『水滸傳』のそれと照らし合わせることによって浮かび上がったのは、まさしく「淫婦」なのだ。『金瓶梅』にお

ける「淫婦」は、様々に描き出される人間達の一要素（或いは最大の要素）ではなく、他とは明らかに一線を畫す、まさに物語の骨格を形づくる存在なのである。『金瓶梅』は、『水滸傳』という「英雄」の物語を、「淫婦」の物語へと轉換させたのである。

三 「英雄」から「淫婦」への視點の轉換

以上、『金瓶梅』が『水滸傳』の構成を利用しつつ、「英雄」の物語を「淫婦」の物語へと轉換させたものであることを指摘したが、では何故『金瓶梅』は「英雄」の物語と同じ構成を用いて、「淫婦」の物語を作り上げたのだろうか。逆に言えば、何故『金瓶梅』は「淫婦」の物語である必然性があったのだろうか。

『金瓶梅』の主人公である潘金蓮が、『水滸傳』第二十三回〜第二十回に登場するあの潘金蓮と同一の人物として設定されていることは上述した通りである。しかし名前こそ異なれど、『水滸傳』には潘金蓮の他にも、彼女の如き女性が複數描かれる。第二十一回に登場する閻婆惜、第四十四回〜第四十六回に登場する潘巧雲、そして第六十一回〜第六十二回及び第六十六回〜第六十七回に登場する賈氏である。彼女達はいずれも夫がいる身でありながら他の男と關係を持ち、「英雄」に殺される運命を持つ「淫婦」である。そんな彼女達の形象をそのまま受け繼いで造型されたのが、『金瓶梅』の潘金蓮、李瓶兒、宋惠蓮なのだ。彼女達もまた夫がいる身でありながら他の男（西門慶）と關係を持つ「淫婦」に他ならない。

實際、『水滸傳』の「淫婦」、『金瓶梅』の「淫婦」を見てみると、彼女達の基本的な形象は変わらないながらも、兩者の間には單に描寫の多寡による相違だけではない、執筆態度の明らかな相違が認められ

る。それは『金瓶梅』が彼女達「淫婦」の側から進行していくという點である。『金瓶梅』前半の銘々傳（潘金蓮、李瓶兒、宋惠蓮）は、單に西門慶の側から描かれた女性遍歴ではなく、彼女達が如何にして西門家へと集まってくるかという女性側の視點で描かれている。「英雄」が主人公の『水滸傳』において、彼女達のような「淫婦」は「英雄」に即斬り捨てられてしかるべき「對象」でしかない。彼女達が他の男に想いを寄せるようになった理由や過程などは描かれない。そんなことはどうでもいいのである。彼女達の心情など誰も問うことなく、物語は進行する。しかし、そんなに簡單に斬り殺されるものなのか、彼女達にもそうならざるを得ない事情があったのではないのか、そんな『水滸傳』の一元的な價值觀においては、一刀のもとに斬り捨てられる「對象」でしかなかった「淫婦」の側から物語を作り直したのが『金瓶梅』である。つまり、『金瓶梅』の作者は『水滸傳』から「淫婦」という要素を抜き出し、彼女達の物語を作り上げたのである。以下、具體例を挙げながら確認を試みたい。

潘金蓮は奉公先の張大戸に、無理矢理「三寸丁谷樹皮（ちんちくりんのあばた男）」とあだ名される武大に嫁がされる。

原來這婦人見武大身材短矮、人物猥獐、不會風流。

女が見ますに、武大はチビで人間も野暮、男女の粹はまるでわかりません。【第二十四回】

潘金蓮が武大を不満に思う描寫は、『水滸傳』ではこのように簡單なものである。一方『金瓶梅』では、潘金蓮の武大に對する不満が詳しく記される。

原來金蓮自從嫁武大、見他一味老實、人物猥獐、甚是憎嫌、常與他合氣、報怨大戸、「普天世界、斷生了男子、何故將奴嫁與

這樣個貨。毎日牽着不走、打着倒腿的、只是一味味酒。着緊處都是錐扎也不動。奴端的那裡悔氣、却嫁了他。是好苦也。」
そもそも金蓮は武大に嫁いだからというもの、武大がどこまでも馬鹿正直、野卑でうだつが上がないものですから、ひどく嫌い、武大に腹を立ててばかり、大戸を恨んでいたのです。

「この世の中、男の根が絶えたわけじゃあるまいし、何であたしをこんな奴のところにお嫁にやったんだらう。毎日毎日牽いても進まず打てば後ずさり、のんびんだらりと酒ばかり飲んで。肝心な時だって、針で刺しても動きやしない。何の因果でこいつのところにお嫁ぐことになったんだか。ほんとに辛いわ。【第一回】

しかし『金瓶梅』の方は單なる描寫の増加だけでは終わらない。續けて、『水滸傳』には見られない潘金蓮の嘆きが綴られる。

(潘金蓮) 常無人處彈個「山坡羊」爲證、

想當初、姻緣錯配、奴把他當男兒漢看覷。不是奴自己誇獎、他烏鴉怎配鸞鳳對。奴真金子埋在土里、他是塊高號銅、怎與俺金色比。他本是塊頑石、有甚福抱着我羊脂玉躡。好似糞土上長出靈芝、奈何、隨他怎樣、倒底奴心不美。聽知、奴是塊金磚、怎比泥土基。

潘金蓮はいつも人のいないところで「山坡羊」を弾いておりました。

思い返すに最初から、間違いだった縁結び、あんなやつが亭主とは。自慢するんじゃないけれど、あんな烏鴉が何だって、鸞鳳を女房に持てるのか。あたしや土に埋もれた黄金、どうしてあんな赤金と、一緒にされなきゃならないの。あいつはもとも

とただの石、それがいったい何だって、このやわ肌を抱けるのか。まるで泥土に咲く靈芝、ああ、たとえあいつがどんなでも、あたしの心は晴れやしない。ねえねえ聞いてちょうだいな、あたしや金の塊よ、どうしてあんな土くれと、一緒にされなきゃならないの。【第一回】

武大のような男に嫁がされた美しい潘金蓮が、誰に聞かせるでもなく、獨りうたに載せて嘆きの心情を吐露する姿が描き出されている。『水滸傳』では與えられることのなかった「ことば」を、潘金蓮は手に入れたのである。この潘金蓮の嘆きが挿入されることによって、彼女が武松や西門慶に魅せられていく必然性が備わったのである。實際このうたの直後には、以下のような語り手のコメントが付されている。

看官聽說。但凡世上婦女、若自己有些顏色、所稟伶俐、配個好男子便罷了、若是武大這般、雖好殺也未免有幾分憎嫌。自古、佳人才子相湊着的少、買金偏撞不着賣金的。

皆さんお聞き下さい。いったい世の女性というものは、生まれつき器量よしで賢いと、相手が立派な男だといいますが、武大のような男では、たとえどんなに人がよくても嫌気がさすもの。昔から、佳人と才子はなかなか出逢わぬ、といいますが、金の買手はあいにく金の賣り手に出くわさないものなのです。【第一回】
潘金蓮のような美女が武大のような男に不満を抱くのも當然だといふのだ。『水滸傳』においては誰も振り返らなかった、不幸せな結婚をした女性の側に立つコメントである。全く同じ方向性を持つコメントが、李瓶兒に對しても付されている。李瓶兒もまた不幸せな結婚をした女性であった。彼女は廓遊びばかりして家に居着かない夫花子虛に不満を抱いていた。

看官聽說。大抵只是婦人更變、不與男子漢一心、隨你咬拆釘子般剛毅之夫、也難防測其暗地之事。自古、男治外而女治內、往往男子之名都被婦人壞了者爲何。皆由御之不得其道故也。要在乎、夫唱婦隨、容德相感、緣分相投、男慕乎女、女慕乎男、庶可以保其無咎。稍有微嫌、輒顯厭惡。若似花子虛終日落魄飄風、謾無紀律、而欲其內人不生他意、豈可得乎。

皆さんお聞き下さい。だいたい女が心變わりして、男と心をひとつにしなくなると、たとえ釘を咬み砕くほどの剛毅な夫でも、その密事は防ぎ難いものです。昔から、男は外を治め女は内を治める、といいますが、往々にして男の名が女に傷つけられるのはどういうわけでしょうか。みなその御し方が當を得ないためなのです。要するに、夫唱婦隨、互いに相手の姿や德行に感じ合い、縁もしくり結びつき、男は女に慕われ、女は男に慕われるというようになつて初めて、その安泰を保つことができるということ。少しでも嫌いなところがあれば、すぐにその氣持ちは外にあらわれます。花子虚のように日がな一日廓遊びにあけくれ、てんでしまりがなくせに、女房に他意を起こさせまいとしても、それは到底無理なことです。【第十四回】

そんな花子虚に愛想を盡かした李瓶兒は、西門慶と密通した挙げ句夫を死なせることとなるのだが、ここにも彼女がそうなるに至る必然が語られている。不釣り合いな結婚をさせられた潘金蓮、閻婆惜（彼女は色黒でチビで不粹な宋江に嫁がされる羽目になるが、そんな宋江が嫌いであらざる浮氣をする）、夫にはつたらかしにされる潘巧雲（彼女の夫楊雄は仕事潰けの毎日を送る。その間に彼女は坊主と浮氣をする）、賈氏（武藝一筋の夫盧俊義も女には關心を示さない。その間に

彼女は番頭と通じる）、彼女達に目を留め、彼女達に寄り添う視點で作り直されたのが『金瓶梅』なのである。

『金瓶梅』には、そんな「淫婦」達の「待たされる女心」も細やかに描き出される。『水滸傳』には決して描かれることのなかった心情である。

武大毒殺の後、「如魚似水」「如膠似漆」の日々を送る西門慶と潘金蓮であったが、そんな中、西門慶に別の結婚話が持ち上がる。第三夫人となる孟玉樓との結婚話である。その結果、西門慶の足は潘金蓮の元から遠のくこととなる。

那婦人毎日長等短等、如石沉大海一般、那裡得個西門慶影兒來。看看七月將盡、到了他生辰。這婦人挨一日似三秋、盼一夜如半夏、等了一日、杳無音信、盼了多時、寂無形影。不覺銀牙暗咬、星眼流波。……原來婦人在房中、香薰鴛被、款剔銀燈、睡不着、短歎長吁、翻來覆去。正是「得多少琵琶夜久殷勤弄、寂寞空房不忍彈。」于是獨自彈着琵琶、唱一個「綿搭絮」爲證、

當初奴愛你風流、共你剪髮燃香、雨態雲踪兩意投。背親夫和你情偷、怕甚麼傍人講論、覆水難收。你若負了奴真情、正是緣木求魚空自守。……

原來婦人一夜翻來覆去、不曾睡着。

女は毎日、今日か明日かと待ちこがれておりましたが、石の大海に沈んだが如く、西門慶の姿は見えません。みるみるうちに七月も残すところわずかとなり、西門慶の誕生日がやってきました。女は一日千秋、一夜半夏の思いで待ち續けますが、いくら待っても音沙汰はなく、どれだけ俵っても叔として影も形も見えません。覺えずひそかに齒を食いしばり、瞳からは涙があふれます。……

女は部屋の中で夫婦布團に香を焚きしめ、ねんごろに燈火をかき立てますが、寝付くこともできず、しきりにため息をついては、寝返りを打つばかり。まさに「夜長になぐさむ琵琶あれど、寂しき闇にて弾くに忍びず」というところ。そこでひとり琵琶を弾きながら、「綿搭絮」を唱えます。

粹なあんたを見初めた頃にゃ、あんたの爲に髪を剪り、灸まで据えて、二人して、息もびったり濡れたじゃないの。夫に背を向けあんたに逢って、他人の噂もなんのその、もうあの頃には戻れない。あんたあたしを捨てるのかい、こんなあたしを捨てるのかい。何を言ってもあんたは歸らず、ひとりむなしく闇で待つ。……。

女は一晚中寝返りをうつばかりで、一睡もしませんでした。【第八回】

これが、西門慶と密通し夫を毒殺した『水滸傳』のあの「淫婦」の姿である。このような描寫は潘金蓮のみに見られるものではない。李瓶兒もまた、西門家への興入れが決まった矢先、待ちぼうけを食らわされることとなる。

婦人又等了幾日、看看五月將盡、六月初旬。朝思暮盼、音信全無。夢攘魂勞、佳期閒阻。……婦人盼不見西門慶來、每日茶飯頓減、精神恍惚。到晚夕孤眠枕上、展轉躊躇。忽聽外邊打門、彷彿見西門慶來到。婦人迎門笑接、携手進房、問其爽約之情、各訴衷腸之話。綢繆纏繞、徹夜歡娛。鷄鳴天曉、頓抽身回去。婦人恍然驚覺、大呼一聲、精魂已失。慌了馮媽媽進房來視、婦人說道、「西門慶他剛纔出去、你關上門不會。」馮媽媽道、「娘子想得心迷了。那裡得大官人來。影兒也沒有。」婦人自此夢境隨邪。夜夜有狐狸假名

『金瓶梅』の構想

抵姓、來攝其精髓。漸漸形容黃瘦、飲食不進、臥牀不起。

女はそれから更に數日待ちますが、みるみるうちに五月も終わりに近づき、六月の頭になってしまいました。朝に夕べに思い焦がれても、何の音沙汰もありません。寝ても覺ても思い續けますが、興入れの予定日にも会うことができませんでした。……女は西門慶を待ちこがれるあまり、日々食事の量が減り、頭もぼうっとしてきました。夜も獨りぼっちの寢床、寝返りをうってはあれこれ思い悩むばかりです。と、突然外で門を叩く音が聞こえ、西門慶が入ってくるのがぼんやりと見えるではありませんか。女は笑顔で出迎え、手を携えて部屋へ入ります。それから約束を違えた事情を尋ね、互いの胸中を語り合いました。纏綿として離れがたく、夜を徹して歡びにふけます。ところが夜が明けると、西門慶はにわかには抜けだして歸ってしまいました。女ははっと目を覺まして大聲を上げますが、その時すでに正氣は失われています。慌てた馮ばあやが部屋へ入って来て見ると、女は、「西門慶がたつた今出ていったけれど、お前、門は閉めたかい。」と尋ねます。馮ばあや、「奥さまは想いのあまり心がおかしくなってしまうわね。たんですね。どんな様なんていらっしやいませんよ。影だつて見えません。」女はそれからというものの夢の世界で取り憑かれることとなります。夜な夜な狐が化けて出ては、その精髓を吸い取っていくのです。次第に顔はやせ衰え、食も進まず、床に臥したまま起きてこなくなりました。【第十七回】

西門慶に戀い焦がれる餘り精神のバランスを崩し、憔悴していく李瓶兒の姿が描かれる。しかし彼女も西門慶と通じ、夫を死なせた「淫婦」に他ならないのである。

『金瓶梅』ではこのように「淫婦」の「心」を描出しつつ物語が進行していく。彼女達が「淫婦」であることに変わりはない。それどころか、彼女達の不貞ぶり、悪辣ぶりは、『水滸傳』に比べて遙かに肥大化している。彼女達は徹底的に「淫婦」として描かれるのである。と同時に、『水滸傳』では描かれることのなかった、その裏にある「心」が描き出される。この手法により、彼女達がそうならざるを得なかった必然性加わるのである。『水滸傳』の銘々傳には、「英雄」達が落草するに至るまでの事情が描かれる。彼らはお尋ね者のアウトローであり、人も殺せば盗みも働く盜賊に他ならない。社會通念において、彼らは歴とした「悪」なのだ。しかし彼らの多くは何も好きこのんで盜賊に身をやつした譯ではない。そこにはやむにやまれぬ事情があった。彼らの視點で物語が進行することにより、盜賊とならざるを得なかった必然が語られる。であるならば、その『水滸傳』の世界ではないか。『金瓶梅』の銘々傳では、女性達が西門家に與入れするに至るまでの事情が描かれる。この銘々傳を形成する潘金蓮、李瓶兒、宋惠蓮の三人は、『水滸傳』の世界において完全な「淫婦」とされる形象を持つ女性である。そして彼女達もまた社會通念においては「悪」と見なされる存在である。しかし彼女達とて何も好きこのんで西門慶と通じ夫を破滅に追い込んだ譯ではない。そこには彼女達なりのやむにやまれぬ事情があった。彼女達の視點で物語が進行することにより、そしてその「心」が描き出されることにより、「淫婦」とならざるを得なかった必然が語られるのである。

『金瓶梅』に見られるこの「英雄」から「淫婦」への視點の轉換は、武松描寫においても確認できる。『水滸傳』における武松は言うまで

もなく「英雄」であり、『水滸傳』第二十三回と第二十七回は彼の立場から物語が構成されている。ところが、潘金蓮の「心」に寄り添う形で物語が構成される『金瓶梅』において、武松描寫には單に主人公から脇役への降格に伴う描寫の簡略化の問題にとどまらない、明らかな變化が見られる。上司の命により自分が東京へ行っている間に、潘金蓮、西門慶、及び彼らに計を授けた王婆によって兄武大が毒殺されたことを知った武松は、『水滸傳』にては近所の者達を集め、彼ら證人の前で潘金蓮と王婆に事實を吐かせた後、潘金蓮を殺し（その後西門慶をも探し出して殺す）、證人及び王婆を伴って役所に赴く。ここでの武松は、計畫的且つ冷靜に兄嫁潘金蓮殺しを實行し、その後潔く自首するのである。一方『金瓶梅』の武松は、西門慶殺しに失敗し、流された後、第八十七回再び戻ってきて潘金蓮と王婆の息の根を止める。その後彼は王婆の息子まで殺そうとした上、葛籠の中から釵や首飾りをも奪って梁山泊へ逃げることになっている。『水滸傳』第二十三回と第二十七回に描かれる武松が第三者に危害を加えることがなかったのとは異なり、『金瓶梅』の武松は、李外傳（武松の情報を西門慶に知らせた下役人）を怒りにまかせて殺したり（第九回）、王婆の息子までも殺めようとしてみたり（第八十七回）、更には金目の物まで掠めたりと、明らかに殺人鬼に近い人物として描かれている。つまり、『水滸傳』の「英雄」武松↓「金瓶梅」の「殺人鬼」武松、という轉換は、『水滸傳』の潘金蓮↓「金瓶梅」の潘金蓮、に見られた轉換と表裏一體をなすものである。

まさに、『金瓶梅』は『水滸傳』と同じ枠を用い、心理描寫をも織り込みながら、『水滸傳』を裏返してみせた作品であると言えよう。單に出だしの部分のみ『水滸傳』に據り、後は獨自の世界を展開させ

たというのではない。殺されるはずだった悪玉西門慶と潘金蓮を主人公に据え、活躍させたというだけでもない。『金瓶梅』は、「英雄」の物語を、その「英雄」によって聲を奪われた「淫婦」の物語に仕立て直し、彼女達の聲を聞こうとした物語だったのである。

おわりに

本稿では、『金瓶梅』が『水滸傳』の構成を意識的に模倣していること、そして同じ外枠を用いつつ、『水滸傳』そのものを反轉させていることを指摘した。『水滸傳』が、「英雄」達がやむにやまれぬ事情により、宋江を中心とした梁山泊へ集結する様を描くのに対し、『金瓶梅』は、その『水滸傳』においては「英雄」に斬り捨てられる「對象」でしかなかった「淫婦」達の視点から、彼女達が西門家へと集結する様を描いているのである。その後、『水滸傳』では宋江の下に集結した「英雄」達が忠義を旗印に一致団結して活躍するが、『金瓶梅』では西門慶の下に集まった女性達が嫉妬や不倫を繰り広げ、内部分裂を引き起こすこととなる。『金瓶梅』は單に部分的に『水滸傳』の文章やプロットを引用したり、『水滸傳』中の人物をそのまま登場させたりといった表層的なレベルにとどまらず、もっと根源的に『水滸傳』を母胎とした作品である。全體の構成までも利用しつつ、裏と表をひっくり返してみせたのである。そこには、善玉が悪玉を成敗するという『水滸傳』の短絡的な價值觀に對して、「人間はそんなに單純なものではない」といった、ある種の嘲笑、皮肉すら窺える。

この、『金瓶梅』に見られるような女性の側からその心理を描くという發想、手法は、閨怨詩が女性の心情を詠み、戯曲でも女性が自ら的心情をうたに載せて唱う等、韻文の世界では古くから存在している。

『金瓶梅』の構想

そのいかにも韻文的な視點で『水滸傳』を眺め、「英雄」達の手でいとも簡単に殺されゆく「淫婦」に目を留めた人間がいた。そして彼は筆を執り、韻文的な手法をも取り入れつつ、『水滸傳』から全く新しい作品、『金瓶梅』を誕生させたのである。

『金瓶梅』における女性の心理描寫は、單に直接的な表現に留まらない。彼女達の様々な生態を通して、その「心」が浮かび上がる仕組みになっている。例えば『金瓶梅』を特徴づける最も大きな要素として、過剰な性描寫が挙げられよう。特に潘金蓮の性描寫は量的にも質的にも他の女性を遙かに凌いでいる。女性の心理を描くことが目的であれば、これら興味本位的な性描寫は不必要にも思われる。しかし、一見必然性が無いようにも思われるこれら過剰にして執拗な性描寫も、潘金蓮の「心」と密接な關係を持って描かれる傾向にあることが指摘できる。性描寫までもが彼女の「心」を表現する手段として用いられているのである。このことに關しては稿を改めて論じる豫定であるが、『金瓶梅』が單なる好色小説にとどまらなかった所以も、女性、それも從來描かれようとはしなかった、「淫婦」の「心」を様々な角度から描き出した點にあると言えよう。このことからしても、『金瓶梅』の女性描寫、その發想と手法は、中國文學史における女性の發見だったと言えるのではないだろうか。

注

- (1) 大内田三郎『水滸傳』と『金瓶梅』(天理大學學報) 85、1973。
- (2) 『金瓶梅』の素材を指摘した主なものを以下に記す。P. D. Hanan『Sources of the Chin Ping Mei』(『Asia Major』N. S.] vol. X, Part I, 1960) ↓荒木猛譯「金瓶梅の素材」(長崎大學教養部紀要(人文科學編))

35—1、1994)、荒木猛『金瓶梅』素材の研究(1)——特に俗曲・「寶劍記」・「宣和遺事」について——(『函館大學論究』19、1986)、黃霖『忠義水滸傳』與『金瓶梅詞話』(『金瓶梅考論』遼寧人民出版社1989)、荒木猛『話本』と『金瓶梅』(『長崎大學教養部紀要(人文科學編)』30—2、1990)、荒木猛『金瓶梅』中の散曲について(『國語と教育』21、1996)等。

(3) 『金瓶梅』と他の作品との構想面における比較を行った主なものを以下に記す。日下翠『金瓶梅』と『寶劍記』(『中國戯曲小説の研究』研文出版社1995)、大塚秀高『金瓶梅』の構想——『封神演義』『三國志演義』との關係を中心に——(『東方學會創立五十周年記念東方學論集』1997)、大塚秀高『玉皇廟から永福寺へ——『金瓶梅』の構想(續)——(『東洋文化研究所紀要』137、1999)等。

(4) 『水滸傳』と『金瓶梅』との關係を論じた主なものを以下に記す。上野恵司『水滸傳』から『金瓶梅』へ——重複部分のことばの比較——(『中國文學會紀要』3、1970)、大内田三郎『水滸傳』と『金瓶梅』(『天理大學學報』85、1973)、寺村政男『水滸傳』から『金瓶梅詞話』への變化——罵語を中心として——(『中國總合研究』創刊號1975)、駒林麻理子『金瓶梅』と『水滸傳』——二つの作品における變化と比較——(『東海大學紀要(教養學部)』12、1981)、鈴木陽一『金瓶梅』の表現方法について(1)——『水滸傳』との重複部分を中心に——(『人文研究』84、1983)、川島郁夫『水滸傳』と『金瓶梅』(『神田外語大學紀要』1、1989)、日下翠『水滸傳』と『金瓶梅』(『金瓶梅』中公新書1996)等。

(5) 本稿でいう『水滸傳』は、『金瓶梅』の作者が據ったとされる百回本を指す。尚、引用文は『容與堂本水滸傳』(上海古籍出版社1988)、『金瓶梅詞話』(大安影印本)に據った。

(6) 『水滸傳』の構成に關しては、小松謙『水滸傳』成立考——内容面から

のアプローチ』(『中國文學報』64、2002)等に詳しい。

(7) 筆者のとらえる細かい内譯を以下に記す。
・潘金蓮の物語：…第一—十回「西門慶と出會った潘金蓮が西門慶の夫人となるまでの物語」(本編、第十一—十二回「西門家に嫁いだ後の潘金蓮とそれを巡る西門家の様子」(第十二回「家庭圓滿な様子」)。

・李瓶兒の物語：…第十三—十九回「西門慶と出會った李瓶兒が西門慶の夫人となるまでの物語」(本編、第二十—二十一回「西門家に嫁いだ後の李瓶兒とそれを巡る西門家の様子」(第二十一回「家庭圓滿な様子」)。
・宋惠蓮の物語：…第二十二—二十六回「西門慶と出會った宋惠蓮が西門慶の夫人となることなく縊死するまでの物語」(本編、第二十七—二十九回「宋惠蓮の一件の後始末と家庭圓滿な様子」(第二十九回「吳神仙の占」)。

いずれもそれぞれの物語が落着いたところで家庭圓滿な様子が描かれる等、短篇的な要素を持っていることが指摘できる。

(8) 『金瓶梅』が『水滸傳』の構想を意識している一例として、荒木猛『金瓶梅』の發想(『長崎大學教養部創立三十周年記念論文集』1995)では、兩書のストーリー上の重大な轉換點ともいうべき場面(『水滸傳』における招安の場面と、『金瓶梅』における李瓶兒出棺の場面)に、書き出しを同じくする駢語が使われているとの指摘がなされている。

(9) 武田泰淳『淫女と豪傑』『金瓶梅』と『水滸傳』——(『象徴』2、1947、後『武田泰淳全集』筑摩書房1972所収)等。

(10) 小野忍『金瓶梅』(『中國の名著——その鑑賞と批評』勁草書房1996)、『澤田瑞穂』『金瓶梅』の研究と資料』(『中國の八大小説』平凡社1965)等。

(11) この點に關しては拙稿『金瓶梅』における春梅の機能』(『岡村貞雄博士古稀記念中國學論集』1999)においても指摘した。その他、小南一郎『李娃傳の構造』(『東方學報』58、1986)、井波陵一『金瓶

- 梅』の構想」〔東方學報〕58、1986）等にも同様の指摘が見られる。
- (12) 李瓶兒のモデルは盧俊義の妻賈氏ではないかとの指摘は、P. D. Hanan 氏の前掲論文(2)にも見られる。
- (13) P. D. Hanan 氏の前掲論文(2)にも、『金瓶梅』の作者は武松描寫において「單に氣味の悪い賈質の持ち主であることのみアクセントをおいたのである。」との指摘が見られる。